

東洋紡株式会社 2024 年度 第 3 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2025 年 2 月 13 日（木） 9:00～9:50

場所：WEB 形式

説明者：執行役員 CFO 管理部門統括 斧 泰三

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：フィルムの 3Q 営業利益の下押し要因は何か？今後、改善するのか？

A：セラミックコンデンサ用離型フィルム（以下、MLCC）の新機台の立上げ費用を 3Q に集中して計上した。
2025 年春の商業生産開始に向け、立上げ準備は順調に進んでおり、今後費用は減少していく見通し。

Q：“コスモシャイン SRF”の需要の見通しは？

A：足元の需要は堅調に推移しており、この状況は 4Q、および来年度も続くと考えている。

Q：MLCC の 3Q 累計の実績、通期の見通しは？

A：3Q 累計は前年同期比で約 5%の増収。通期は前年度比約 5%増収の見通し（売上高ベース）。
市場は拡大基調にあるが、当初想定していたほど拡大スピードは速くない。

Q：包装用フィルムの値上げの状況は？

A：製品価格の改定については、原燃料価格高騰分だけでなく、物流費や人件費等の上昇分の転嫁についても交渉を進めてきている。年初に想定していたものは概ね実施できており、2023 年度までの原燃料価格高騰分については転嫁できたと考えている。但し、これで完了ではなく、今後もコストの動向を見ながら、製品価格の改定の検討を継続する。

Q：包装用フィルムの新製品（OPP フィルム“パイレン EXTOP”）が収益貢献するのはいつごろか？

A：今年度は新製品の立上げに苦戦したが、漸くお客さまへの少量での提供が可能となった。“パイレン EXTOP”は、モノマテリアルや減容化の実現に貢献する環境配慮型製品であり、お客さまからの引き合いは非常に強い。来期以降、収益に寄与できると考えている。

Q：ライフサイエンスの3Q 営業利益が、2Q から改善していないのは何故か？今後、改善するのか？

A：バイオの一部の銘柄において、原料不作による購入価格の上昇や生産トラブルの影響といった一時的な利益下押し要因が発生した。今後、生産トラブルの対策により、利益改善を図る。

Q：ライフサイエンスは、一時的な利益下押し要因の改善以外に、来年度以降どのように収益を改善していくのか？

A：バイオ、メディカルともに需要は引き続き堅調に推移する見通し。この需要増に対応すべく、バイオにおいては診断薬用原料酵素の製造設備（敦賀）、メディカルにおいては人工腎臓用中空糸膜の一貫生産工場（大館）など、生産能力の増強を順次実施している。加えて、医薬品製造受託においても、黒字化のロードマップに従い、収益性改善を進めている。これらにより、来年度以降、収益改善を図る。

Q：VOC 回収装置の足元の状況は？

A：上期の販売は堅調に推移したが、足元のEV市場の減速影響を受け、下期は減少している。

Q：機能繊維・商事の4Qの営業利益7億円は達成可能か？

A：衣料繊維は、従来、季節因により4Qに収益が伸びる事業である。加えて、中東向け特化生地は需要堅調であり、円安効果もある。更に、国内生産拠点の集約や不採算商材からの撤退などの事業構造改革の効果も出ている。エアバッグ用基布については、取引条件の見直しや価格改定を進めてきている。以上により、昨年度に比べ収益性は改善しており、4Q 営業利益は達成可能と見ている。

Q：エアバッグ用基布の値上げによって、黒字化は当初予定より前倒しになるのか？

A：製品価格の改定により収益性は改善しているが、依然赤字が残っており、黒字化は前倒しにならない。黒字化のロードマップに沿って事業構造改善を進めており、今後、タイ原糸工場の稼働率を上げていくことで黒字化を達成する。黒字化は2026年度の見込み。

Q：今後、財務体質をどのように改善していくのか？

A：ハイブリッド・ファイナンスにより、D/E レシオは管理範囲内に留まっているものの、先行投資により、足元の財務体質は悪化している。まずは、既に実施している成長投資を早期に立ち上げて収益化を図る。加えて、設備投資を見直した結果、キャッシュアウトがピークアウトしてきている。以上により、今後、財務体質は改善する見通し。

以上